

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02523

研究課題名(和文)小説と学校 - 19世紀イギリスにおける文学と教育

研究課題名(英文) Novel and School: Literature and Education in Nineteenth-Century Britain

研究代表者

玉井 史絵 (Tamai, Fumie)

同志社大学・グローバル・コミュニケーション学部・教授

研究者番号：20329957

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は19世紀イギリスにおける教育と文学のかかわりを、Dickens、Gaskell、Gissingを中心に考察した。作家たちがどのような教育観を抱き、じっさいに教育に関わったかや、当時の教育に関する様々な書物や雑誌記事と共に作品を読み解くことで、作家たちがいかに教え、学び、成長するという行為を表家し、公教育とは異なる文学の意義を擁護したかを検討した。特に、共感の教育という概念を軸に、それぞれの作家が自らの教育的役割を定義し、作家としての自己像を確立していった過程を解明することができたのは、本研究の最大の成果であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では「共感の教育」という概念を軸に3人の作家たちにおける教育と文学の関りを検証した。Dickensは共感の教育を読者に施すことが小説の役割と定義し、作家としての地位を確立し、Gaskellは階級の違いを超えて共感し合う登場人物を描くことで現実社会の階級対立を解消しようとした。他方、Gissingは労働者階級への安易な共感を否定し、その現実を描写し世に知らしめることが作家の教育的使命と考えた。文学の教育的意義をめぐる作家の姿勢の変遷を辿ることができたことは本研究の意義である。こうした成果は、現代における文学と教育的意義を考察する上でも重要な知見を提供するものである。

研究成果の概要(英文)：This study examined the relationship between literature and education in nineteenth century Britain with special focus on Dickens, Gaskell and Gissing. It investigated what view they had about education, and how they were involved in education in their real life. By reading their works alongside various books and articles on education at the period, this study also analyzed how they represent the act of teaching, learning and growing in their works, and how they advocate the importance of literature, which can offer different kind of education from the one offered at school. Centering on the idea of education of sympathy, it illuminated the process of each author's defining his/her educational role and fashioning his/her identity as a novelist.

研究分野：19世紀イギリス文学

キーワード：19世紀イギリス小説 教育 共感

1. 研究開始当初の背景

ヴィクトリア朝における教育と文学に関しては、これまでも英文学教育の歴史、女性教育と読書、労働者階級の教育と読書文化、文学のなかに描かれる教育など、様々な側面から論じられてきた。Dickens と教育に関しては Philip Collins による古典的研究 *Dickens and Education* (1963)がある。近年出版された主要な研究書としては、知識偏重の教育への文学の側からの批判を分析した Dinah Birch の *Our Victorian Education* (2008)、教育制度の枠外にいた作家たちがいかに教育を批判し、代替教育としての文学を創造したかを論じた Sheila Cordner の *Education in Nineteenth-Century British Literature* (2015) などがある。また、Elizabeth Gargano の *Reading Victorian Schoolrooms: Childhood and Education in Nineteenth-Century Fiction* (2008) は、小説に描かれた学校空間に着目し、規格化、画一化の進む公教育へのヴィクトリア朝の作家たちの批判を読み解いた、興味深い研究である。

しかし、上記のような研究を除いて、教育史のコンテクストのなかで文学作品を再考した包括的な研究は意外にも少なかった。特に、従来の研究では、功利主義的公教育へのアンチテーゼとしての文学の役割のみが強調される傾向があった。しかし、ヴィクトリア朝の作家たちは、公教育に入り込み、積極的に推進した一面もあり、功利主義的公教育との関係は一樣ではない。ヴィクトリア朝の作家たちは小説において画一的公教育を批判する一方で、ジャーナリズムや実生活ではそれを積極的に支持し、推進する主張を展開していたという事実も見逃してはならない。作家たちは「文学の有用性」という功利主義的価値を巧みに主張しながら作品を生み出し、作家としての地位を築いていったのである。そこで、そうした作家たちの巧みな戦略を明らかにすることにより、19世紀の文学と教育についての新たな知見を見出すことを本研究の目的とした。

2. 研究の目的

これまでの研究成果を踏まえ、ヴィクトリア朝中期から後期までの教育の変遷を背景に、作家たちが教育との関わりのなかでいかに文学の役割を定義し、作家としての地位を築いていったのかを、ヴィクトリア朝中期から後期に活躍した3人の作家、Charles Dickens、Elizabeth Gaskell、George Gissingを中心に、以下3つの論点を軸に包括的な議論へと発展させていくことを目的とした。

- (1) 作家としての確立と教育との関わり：作品を創作し、その著作物を出版市場で流通させて収入を得る職業としての作家が生まれた時代は、労働者階級のための学校が公教育として認知され、発展していった時代と一致する。19世紀イギリスでは、都市の貧困、不衛生、犯罪などの諸問題を解決するべく、労働者階級や貧民に対する教育の重要性が広く人々に認識され、公的な訓練を受けた教師が誕生した。作家たちは教育をめぐる議論に参加し、実社会においても教育活動に積極的に関与することで、社会改革者としての自己像を読者に提示し、作家としての地位を築いていった。作家たちと当時の教育改革者との交流や、彼らが直接かかわった教育活動を書簡や雑誌記事を通して検証することにより、作家たちの教育観を明らかにし、それがいかに作家としての地位の確立と結びついているかを検証する。
- (2) 教え、学び、成長するという行為の表象：近代教育学の原点となった Jean-Jacques Rousseau の *Emile* はロマン主義以降の子供観にも大きな影響を与えた。作家が教師として子供の成長を観察し記録する形式は、ヴィクトリア朝以降の作家たちにも受け継がれている。実社会では功利主義的公教育を支持した作家たちだが、作品においてはさまざまな成長のモデルを提示し、教え、学び、成長する行為を描いている。本研究では、その表象を分析することにより、公教育との接点と分岐点を考察する。
- (3) 文学の教育的役割の定義：ヴィクトリア朝の作家たちは識字率の高まりとともに拡大する読者層に対して、娯楽として、また教育として、自らの作品を提供した。彼らが活躍した時代は、民主主義の進展とともに、労働者階級を市民として包摂する必要性が高まり、国民統合の手段としての文学の役割が重視されていった時代でもある。小説の大衆化と教育の大衆化は同時進行したのである。本研究では、時代の推移に呼応して作家たちが文学の役割をどのように定義したのかを検証する。

3. 研究の方法

本研究はこれまでの研究成果を総括しつつ、より精緻で包括的な議論へと発展させていくために、3人の作家が活躍した1830年代後半からヴィクトリア朝末期までを、便宜上以下の3つの時期に分ける。

- 1830年代後半から1850年まで：国民教育の必要性について認識され、議論され始めた

時代。

- 1850 年から 1870 年まで：Mathew Arnold などの批評家たちや、当時まだ萌芽期にあった大学の英文学講座で教鞭をとった教授たちが、国家アイデンティティを創造/想像する手段としてとしての文学教育の重要性を主張した時代。
- 1870 年から 1900 年代初めまで：大英帝国が積極的な領土拡大策に転じる新帝国主義の段階に入り、文化が狭量な jingoism に傾斜していくなか、愛国的な国民を養成する手段として英文学の教育が推進された時代。

これら 3 つの期間それぞれの教育史のコンテキストを踏まえつつ、その期間の時代精神と密接にかかわりあった小説を選定し、分析を行っていく。それぞれの時代の教育に関する第一次文献により歴史的コンテキストを確認したうえで、時代精神と密接にかかわりあった作品を選定し、分析する。また、作品の分析と並行して、書簡や雑誌記事をより広範、かつ綿密に検討し、それぞれの作家の教育観を明らかにする。

4. 研究成果

研究計画に基づいて 5 年間研究を進めていったが、大学での役職や新型コロナによる教育環境の変化への対応等、計画当初には予期できなかった様々な要因により、計画のすべてを実行できたわけではなかった。しかし、一方で、計画当初は思い至らなかった着眼点を見出し、研究を新たな展開へと進めることができた。以下、何ができて何ができなかったのかを具体的に報告する。

まず、研究計画にあった 3 つの目的はおおむね達成することができたが、計画で取り上げる予定であった 3 人の作家のうち、Gaskell については、研究自体を進めることができたものの、成果としての学会発表や論文発表を期間内に行うことはできなかった。また、計画にあった 3 つの時期を網羅することはできたものの、成果としては 1830 年代後半から 1850 年代までの成果に比して、残り二つの時期については手薄となってしまった。

こうした不十分な点はあったものの、研究の過程で共感の教育という着眼点を見出し、そこから、それぞれの作家がいかに自らの教育的役割を定義し、作家としての自己像を確立していったかを解明することができたのは、本研究の最大の成果であった。現代においてもなお、文学の教育的意義を議論する際、共感的想像力 (sympathetic imagination) の醸成が意義の一つとして挙げられる。現代アメリカの哲学者 Martha C. Nussbaum は、世界が直面する諸課題に対して問題意識を持ち民主的社會に積極的に参画する市民に必要な資質として、遠く離れた他者に対して共感する想像力を挙げ、こうした能力を醸成する文学教育の重要性を説いている。他者の苦しみに寄り添う共感を社会秩序の根幹に位置づけた Adam Smith (1723-90) の思想は 19 世紀イギリス文学に決定的な影響を与え、多くの作家が共感的想像力の醸成を自らの社会的使命とした。

「共感」はリアリズム小説の本質に迫る概念として 2000 年以降、数々の研究書において論じられてきた。Audrey Jaffa の *Scenes of Sympathy: Identity and Representation in Victorian Fiction* (2000) においては、共感を生み出す視覚の役割に着目し、ヴィクトリア朝小説における共感の表象を当時の視覚的文化の中に位置づけることによって、共感と社会的、文化的アイデンティティ構築との関わりを解明している。また、Bradley Deane の *The Making of the Victorian Novelist: Anxieties of Authorship in the Mass Market* (2003) では、読者との共感関係という視点から、ヴィクトリア朝作家たちがいかに変化する出版界と読者層に対応しつつ、自らの地位を築いていったかを分析している。近年では、Rae Grainer が *Sympathetic Realism in Nineteenth-Century British Fiction* (2014) の中で、19 世紀リアリズムを、共感する心理的習性を涵養する形式定義し、そのような習性を涵養する小説技法を分析することで、共感が生まれるプロセスを検証している。さらに、Jeanne M. Britton は *Vicarious Narrative: A Literary History of Sympathy, 1750-1850* (2019) において、リアリズム以前の 18 世紀後半から 19 世紀前半の英仏小説に着目し、書簡体、枠物語 (frame narrative)、口述筆記といった、登場人物が他者の経験を追体験することを可能とする語り (vicarious narrative) によって、読者の共感を生み出していると論じる。

本研究ではこうした先行研究に基づき、「共感」を軸に 3 人の作家たちの読者に対する教育観を解明していった。Dickens は作家としてのキャリアを歩み始めた当初から、公教育を批判し、その限界を機能不全に陥った学校を描くことによって示した。そして、公教育に代わる共感の教育を読者に施すことが小説の役割と定義し、作家としての地位を確立していった。また、実生活でも様々な教育活動に関与し、労働者階級の教育の推進を訴えることで、小説を通じた社会改革を実践しようとした。これに対して Gaskell は、階級の違いを超えて共感し合う登場人物を描くことで実社会の階級対立をも解消しようとした。しかし、一方で共感力が女性的能力だとされた時代にあって、共感女性に対してさらなる自己滅却を要求するという危険性も孕んでいた。それゆえに彼女の描く共感の教育には、Dickens には見られない懐疑の姿勢やアイロニーも見られる。最後に、Gissing は先輩作家である Dickens から大きな影響を受け、Dickens と同じく社会改革への強烈な使命感をもって小説を書いた。しかし、Dickens とは異なり、安易な労働者階級への共感を否定し、その現実を徹底的に描写し、現実を世に知らしめることこそが作家の教育的使命と考えた。しかし、こうした試みは同時に、労働者階級とミドルクラスとの差異を作家自

身に再認識させるという皮肉な結果となる。実生活においては労働者階級出身の妻の教育にも失敗し、階級間の埋めがたい差異を克服する術を見いだせないままに、Gissing の小説を通じた社会改革の試みは挫折することになる。本研究を通じて、教育をめぐる 3 人の作家の共通点と相違を浮き彫りすることができ、ヴィクトリア朝時代における文学と教育の関連について新たな知見をもたらすことができた。

以上、本研究成果の概要に続いて、本研究期間中に発表した論文の概要を以下に記す。

(1) 分担執筆：松岡光治編『ディケンズとギッシング—底流を成すものと似て非なるもの』(大阪教育図書：2018 年) * 担当章：第 4 章「作家の使命：共感 をめぐるポリティクス」(pp.75-90, 単著)

【概要】小説の教育的意義に対する Dickens と Gissing の見解の相違を前者の『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*, 1840-41) と後者の『暁の労働者』(*Workers in the Dawn*, 1880) に焦点を当てて分析した。二人の作家はともに、自らの小説を通じた読者に対する教育を通じて社会を改革しようとした点において共通するが、そのアプローチにおいては顕著な相違がある。Dickens は登場人物に寄り添う心的仲間意識を醸成することによって、弱者に対する共感を読者の心に喚起しようとした。それに対して Gissing は共感を排除した観察に基づいて貧民を描写し、その実態を読者に知らしめることこそが、自らの役割であるとし、現実認識から社会改革は始まると考えた。本論文では、こうした比較に基づき、二人の作家の接点と分岐点を解明した。

(2) 論文(単著):「学校と墓地—『ニコラス・ニクルビー』と『骨董屋』における共感の教育(1)」(『コミュニカール』第 8 号、2020 年; pp. 21-40) 査読あり

【概要】初期の作品『ニコラス・ニクルビー』(*Nicholas Nickleby*, 1838-39) における犠牲者としての子どもの表象に着目し、Dickens がいかに公教育を批判し、公教育に代わる作家の役割を定義したかを考察した。Dickens はこの小説のなかで、私立寄宿学校を弱者への搾取に基づく資本主義経済に組み込まれた非人道的な場として批判している。他方、こうした機能不全を起こした公教育に対抗して提示されているのが、作家による共感の教育である。学校が教師のつかさどる身体の教育の領域であるとするならば、墓地は作家のつかさどる精神の教育の領域となる。本論文では、小説に描かれたこの二つの教育の対比を分析し、Dickens の教育観や彼が作家としての地位を確立していく過程を明らかにした。

(3) 分担執筆：Dickens and the Anatomy of the Evil: The Sesquicentennial Essay. Ed by Mitsuharu Matsuoka. Athena Press：2020 年 * 担当章：第 17 章 “Bemoaning the Present Evil Period: The Uneasy Relationship between Sympathy and Social Reform in *The Uncommercial Traveller*.” (pp. 295-312, 単著)

【概要】Dickens 晩年のエッセイ集『非商用の旅人』(*The Uncommercial Traveller*, 1860-69) を取り上げ、社会改革と共感との関係を、1867 年の第二次選挙法改革をめぐる議論という歴史的コンテクストの中で分析し、共感の教育とその限界について考察した。本論文では、特に労働者階級の教育に関するエッセイに焦点をあて、下層社会の中の上位層に属する人々と、いわゆる当時の「残滓」として扱われた最下層民がいることを指摘した。前者が貧民学校や自主運営の食堂といった様々な改革的教育プログラムの対象となり、「イギリス国民」となるべく教育を受けて変容していくのに対し、後者は監視の対象となり、想像の共同体から排除される。Dickens が生涯にわたって抱き続けた、貧しき人々への共感と恐怖という、互いに相容れない複雑な心情を明らかにした。

(4) 論文(単著):「学校と墓地—『ニコラス・ニクルビー』と『骨董屋』における共感の教育(2)」(『コミュニカール』第 11 号、2022 年; pp. 1-25) 査読あり

2019 年に発表した『ニコラス・ニクルビー』における共感の教育を論じた論文の後半部分として、【概要】Dickens の 4 番目の長編小説、『骨董屋』を取り上げ、主人公 Nell を通じた読者への共感の教育について検証した。Nell の視点で物語を描くことによって、Dickens がいかに他者に「寄り添う」という Adam Smith 的な共感を読者に育もうとしたかを検証した。まず、犠牲者としての子ども像に着目し、空腹の Nell の背後にある労働者階級の脅威という社会問題について論じた。次に、公教育に対する Dickens の態度を村の学校の表象を分析することによって解明し、学校教育への批判を Dickens がいかに展開したかを考えた。続いて、Nell による共感の教育を分析し、公教育とは異なる小説の教育的役割を検証した。最後に、Nell の死後に着目し、死者による共感の教育を考察することで、この小説の持つ読者への特殊な影響力の要因を探った。

(5) 分担執筆：日本看護協会出版会(編)シリーズ「ナイチンゲールの越境」6『ナイチンゲールはなぜ戦地クリミアに赴いたか』(日本看護協会出版会 2022 年) 担当箇所「クリミア戦争はどのような戦争だったのか」(pp.1-21)

【概要】クリミア戦争の背景や勃発から終戦までの経過、戦争の特徴、Florence Nightingale が「クリミアの天使」として英雄視されるに至った原因などを概説した。一般読者に向けた書物のなかの概説なので、この論文自体は本研究との直接の関りはないが、執筆の過程で様々な資料を

渉猟するなかで、女子教育の問題、ジャーナリズムと共感、共感とナショナリズムなど、本研究につながる知見を得ることができた。とりわけ、Nightingale との交流があった Gaskell の小説を読み解く上で重要となる女性と共感に関して新たな視点を見出すことができた。

その他、本研究期間中に書評 2 本、英語教育に関する論文を 1 本、英語教育に関するシンポジウム、講演などの研究活動を行った。これらは本研究課題とは直接の関係はないが、いずれも広く文学と教育や文学と共感についての考察を深める上では重要なものである。

本研究課題において中心的なテーマとなった文学と共感については、科学研究費基盤研究(C)「19 世紀イギリス小説における共感と社会改革」(22K0041)においてさらに発展させていく計画である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 玉井 史絵	4. 巻 9
2. 論文標題 学校と墓地：『ニコラス・ニクルビー』と『骨董屋』における共感の教育（1）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 コミュニカーレ = Comunicare	6. 最初と最後の頁 21～39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/00028117	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 玉井 史絵	4. 巻 11
2. 論文標題 学校と墓地：『ニコラス・ニクルビー』と『骨董屋』における共感の教育(2)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 コミュニカーレ = Comunicare	6. 最初と最後の頁 3～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/00028885	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 玉井史絵
2. 発表標題 作家の使命 共感の表象をめぐって
3. 学会等名 ディケンズ・フェロウシップ日本支部秋季大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Mitsuharu Matsuoka (ed)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Athena Press	5. 総ページ数 366（内担当295-312）
3. 書名 Dickens and the Anatomy of Evil	

1. 著者名 松岡 光治, 小宮 彩加, 吉田 朱美, 中田 元子, 玉井 史絵, 金山 亮太, 田中 孝信, 木村 晶子, 松本 靖彦, 新野 緑, 楚輪 松人, 宮丸 裕二, 麻畠 徳子, 三宅 敦子, 橋野 朋子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大阪教育図書	5. 総ページ数 298
3. 書名 ディケンズとギッシング 底流をなすものと似て非なるもの	

1. 著者名 玉井史絵、石川洋一、森田由利子、杉浦裕子、丸山健夫、小宮彩加、中島俊郎、大田垣裕子、金沢美知子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 日本看護協会出版部	5. 総ページ数 179
3. 書名 ナイチンゲールはなぜ戦地クリミアに赴いたのか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------